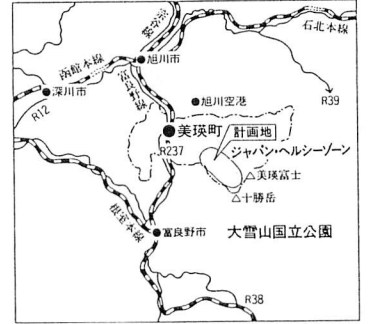


# 自然破壊企業コクドに 批判の目



全山が国立公園に指定されている美瑛富士に、自然破壊企業・コクドがスキー場開発の触手を伸ばして10数年。大規模リゾートが破綻するなか、美瑛町の「ジャパン・ヘルシーズン計画」は岐路に立つ。今こそ環境破壊のない手づくり観光に知恵を絞るべきだ。

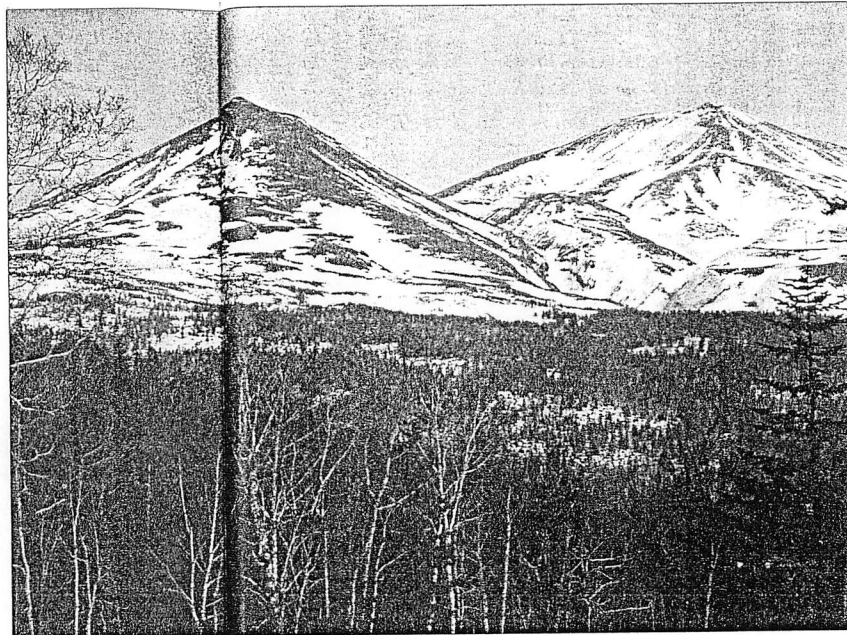
ルポライター  
滝川康治

## 大規模リゾートを見直し 手づくり観光で活性化を

### 腰が定まらない林野行政

十勝岳連峰の山並みとゆるやかなうねる丘陵地帯が絶妙な風景を作りだしている美瑛町。同連峰のひとつ、全山が大雪山国立公園に指定されている美瑛富士（標高一八八メートル）の一大リゾート基地にする「ジャパン・ヘルシーズン計画」が打ち出されてから十数年の歳月が流れた。

この計画の中核をなすのは、全国各地で自然破壊の前科がある、西武資本のコクド（堤義明社長・旧国土計画）が事業主体の美瑛富士スキー場だ。このため、計画の是非をめぐって旭川自然保護団体「大雪と石狩の自然を守る会」（寺島一男代表と地元「ジャパン・ヘルシーズンを進める会」（浜



コクドの林間スキー場計画に狙われた美瑛富士（左の山）。全山が国立公園に指定されている

田利雄会長）が、長年にわたる論争を繰り返してきた。予定地は国立公園の普通地域で、全域が水源涵養保安林に指定されているが、誘致運動に奔走してきた美瑛町と「進める会」などは、スキ場造成の前提となる保安林の指定解除を求めて旭川営林支局と折衝を重ねてきた。

昨年九月中旬、地元と支局との折衝のなかで、こんなやり取りがあった。「地元営林署と支局は、守る会の同意書や確約書がなければ（スキー場計画を進められない）、ということだが？」（町の担当者）

「二通あった方が最高だが、あの会が同意書を書かずはない。普通地域での計画なので、（守る会）はそれほど反対しないのではないかと（当時の旭川営林支局森林活用課長）

営林支局は、国有林を利用してリゾート施設の造成ができる「ヒューマン・グリーン・プラン」の候補地に美瑛富士スキー場を挙げているだけに、保安林解除は計画実現の必須条件だ。そこで、支局の発言を真に受けた「進める会」の役員が寺島代表と接触した。が、国立公園の保全を主張する「守る会」

が態度を変えるはずもなかった。

十一月になると美瑛営林署は、「引き続き守る会の確約を取り付けるための環境整備に努力を」という文書を地元側に示して、振りだしに戻った。

「進める会」の浜田会長は、「支局の注文に一〇〇%応えているのに同意書取り付けを要求し、守る会との修復がな



「ヘルシーズンを進める会」の浜田会長

### 西武で翻弄された軌跡

美瑛富士スキー場計画は、西武資本による北海道のリゾート戦略の一環として始まった経緯がある。

七九年、町を訪問した西武不動産の幹部が、安藤友之輔・前町長に対して美瑛富士一帯を一大リゾート基地にす

いうちは（支局が進める会に）会う必要はない、と門前払いした態度は、官吏としてあるまじき行為だ」と、林野行政の対応に怒りをぶちまける。

同支局の上野一之森林活用課長は、「（保安林解除に）自然保護団体の文書が必要かどうか、判断は難しい。地元側の判断でやることでは」と、困惑の表情で言葉を濁す。わたしの目的は、自然保護と森林保全の関係について確固とした哲学もなく、腰の定まらない林野行政に映る。こんな姿勢では、賛否双方のいずれからも信頼を失うことだけは間違いない。

る計画があることを明かした。翌年には、コクドの堤社長がヘリコプターで現地視察を行ない、町はリゾート誘致に走りだした。商工会を中心に観光開発の機運が高まり、八三年には西武による「美瑛富士スキー場計画」と町側

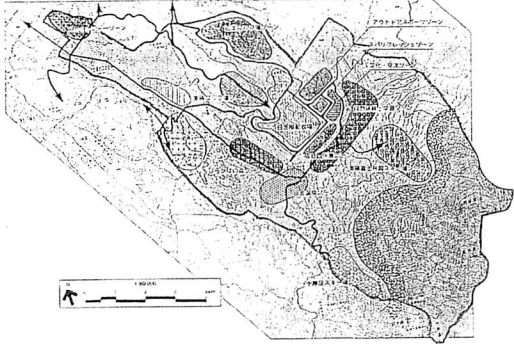
による「白金地区観光開発計画」がつけられていく。

前町長はワンマンで知られ、議会や住民との軋轢を生む場面も多かったようだ。リゾート誘致が行政主導で進むなか、民間サイドからは新たな開発構想が練られ、八四年には「進める会」が発足した。町長との確執も背景に、議会は「美瑛白金地域をヘルシーズンとして再開発を促進する決議」を採択。「住民主導・自然保護・活性化」を旗印にする「進める会」は、九千五百人の住民署名を集めて町民大会を開催して町長サイドの動きを阻んで、前出の開発計画を「ジャパン・ヘルシーズン計画」へと衣替えさせた。

新たな計画は、白金ダム周辺、高原地帯、山岳地帯の三ブロックに、スキー場やゴルフ場、ホテル、ペンション、集会施設などを整備するもので、前計画を焼き直した内容。八七年の総合保養地域整備法（リゾート法）の施行を機に、この計画もリゾート法の適用を受けるようになった。

スキー場を中核にした、重点整備面積約五千六百ヘクタールにおよぶ壮大なヘルシーズン計画は、各地のリゾ

土地利用基本図



壮大な「ジャパン・ヘルシーゾーン計画の土地利用基本図

これに対して「守る会」は、①土地の改変による影響が未検討②植物の移植などは、生

「地元の人たちは、美瑛富士の普通地域が一級品の自然であることを認識すべきだ。新たな野生生物の貴重種が見つかると可能性もある。わたしたちは、

疑問だらけの環境アセス

スキー場以外の自然を活かした地域開発には協力するが、山に手をつけることは認められない(寺島代表)と力を込めて、営林支局や道などに

計画浮上直後から続けられてきた賛否双方の話し合いは、環境アセスメントをめぐる主張が大きく食い違つて九〇年に決裂しており、感情的なवादか

まわりに残っている。

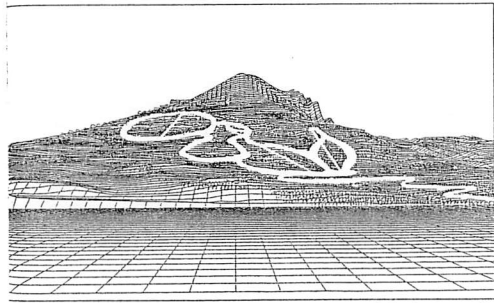
アセスは「守る会」の要求を受けて、町が五千万円を支出して日本林業技術協会に委託したもので、①注目される植物は、移植などの保全対策を講じるので影響は最小化される②クマガラやナキウサギの生息環境は、コース変更などで極力保全される③周辺の自然景観との違和感は生じない——などと結論づける内容だった。が、アセス報告書に添付された完成予想図を見ると、

心に残る滞在型の観光を

丘の町・美瑛は、独特の風景と前田真三氏の「拓真館」との相乗効果などで観光客の人気を集め、年間百万人を超える人が訪れる。旧態依然の発想でコクドに頼らなくても、自前の観光開発が可能な恵まれた町でもある。この十年間に二百人近くが新住民になっており、明るい話題も多い。前出の森戸さんは「手づくりリゾート」を提唱してきた人である。「風景よりも風情が大事。地元の人

一ト事業の破綻や環境問題への関心の高まりもあり進んでいない。「第一期として、白金インフォメーションセンターとビルゲ(ドイツ語で白樺の意)の森、自然の村が進行中。二期目以降は全くの白紙(町ヘルシーゾーン促進対策室)なのが実態である。当初計画では、コクドのスキー場は美瑛富士の北西斜面の標高六百三十メートルから上の約千四百六十六ヘクタールの地域に、グレンデハコース(面積六十ヘクタール)、リフト三基(八ヘクタール)、歩くスキーコース三カ所、駐車場三カ所(千三百三十台分、四・六ヘクタール)、道路(六・五ヘクタール)、レストハウス、汚水処理場などを造り、完成時には年間五十万人のスキー客を呼び込む構想だった。

が、この計画にはリゾート法でも規制している国立公園第一種特別地域の使用が含まれることから、九〇年には国会で問題化し、環境庁も厳しい姿勢をみせた。このため、町は普通地域で実施する形に計画を縮小し、現在に至っている。修正した計画について、町は概要図を示すだけで、具体的な内容を明らかにしようとしなかった。また、事業主体のコクドは、いつさい表面に現れず現在に至っている。関連施設の整備や道路建設などを公費でやらせて進出して、利益は次の事業拡大に回す。税金を最大限に利用するが、自らは税金をほとんど払わない——こんな狡猾な商法で「世界一の大金持ち」にのし上がったのが、コクド社長の堤氏である。三年前まで白金温泉でホテルを経営し、観光組合の役員歴もある森戸昌治さん(旭川在住)は、知人からコクドの口を聞いていたので、水上博町長に西武との関わりをやめるよう進言したことがある。「コクドは、一万円儲けるのに千円を地元へ渡し九千円を懐に入れる商法。西武にお任せの他力本願の発想ではなく、別な観光開発をすべきだ」と強調する。



スキー場の完成予想図(90年の環境影響評価書から作成。その後、左上の円形コースの一部が削除された)

「本来、特別地域に指定すべきところ、生態系無視の暴論③貴重動物の保全は、単に営巣木を残すだけでは不十分③環境庁の調査で貴重種とされたエゾサンショウウオやオシロコマ、昆虫類の評価と対策がない——などと強く反発。一方の「進める会」は、「アセスは開発のゴーストと受け止める」として全面的に対立し、交渉は暗礁に乗り上げたのだった。その後、アセスの修正作業が行なわれ、美瑛町とコクドは九四年十一月、道自然保護課に「環境影響調査報告書」を提出した。道は昨年、環境保全策や国立公園に指定された昭和九年当時御料林だったため、公用制限の少ない普通地域にした経緯がある(町が作成した「ジャパン・ヘルシーゾーン計画書」より)。戦後、何度か特別地域への格上げが試みられたものの、林野庁が難色を示して実現しなかったらしい。環境保全が叫ばれる今となっては、特別地域への格上げを支持する道民は少なくないはずである。自然保護団体は、スキー場開発に反対する理由として、①開発される場所が水源の涵養や国土保全に重要な山の中腹で、森林や野生鳥獣に対する影響が極めて大きい。天然記念物のクマガラの営巣が確認されているほか、水河期の遺存種として知られるナキウサギも生息し、ここを分断するような開発は許されない。②景観の著しい破壊を生じ、国立公園としての性格が大きく歪められる③過去に実施された環境アセスメントは、極めて不十分で恣意的。環境に及ぼす影響の予測・評価も曖昧だ。

傷だらけになる国立公園

山植物園を造って観察してもらおうことは、手つとり早くできる。美瑛は官主導型の町で住民も勉強せずに行政を頼る傾向が強いが、コクドと関係なく、地元で発信していく考え方が大切だ」と、森戸さんが持論を説く。

美馬牛地区で民宿を営む荘司行輝さんは、東京の勤め先を辞めて美瑛に移り住んで六年になる。農家の友人も増えたが、ヘルシージーン計画の話題は聞いたことがない、という。

「よそから大きな資本を投入する考え方に問題がある。美瑛を『丘の町』と言うが、畑の丘陵地帯の方が正確で、農業を営んでもらっていることで人が来ている。孫の代まで農業が続くことが観光を含めた町の将来を保証することになる。農水省も提唱している『グリーンツーリズム』が、これからの考え方ではないか」

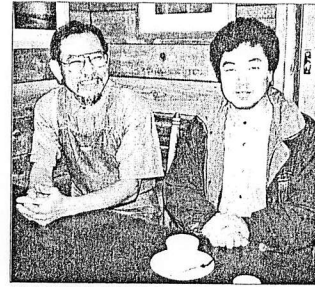
と言う荘司さんは「美瑛富士は山岳スキーが好きな人が訪れる場所に限定すべき」と考えている。

「アジアのなかで、こういう風景は美瑛周辺をおいてない」とみる別の民宿経営者は、手づくりで観光の仕事を広げてきたところにコクドが入ってくる

ことを、こう危惧する。

「ブルドーザーの悪いイメージをつくらないでほしい。大規模なスキー場に固執することはない。その代わり、丘を歩くスキーの専用コースにして、独自の農家青年がインストラクターをやつて出合いの場をつくつてもいい。白金に年配者用の温泉付き住宅を建ててはどうだろうか」

大ボラは無理だけど、小ボラくらいは吹いてみよう——と二年前、町内に「こぼら会」というグループが誕生した。会員は十五人ほど。新住民が半数近くを占め、旧住民の会員には観光関係の人が多い。



滞在型観光を追求する「こぼら会」の岡田さん（左）と白石さん

係の人が多い。月一回のミーティングを開いて、通過型ではない、美瑛の本当の良さに触れてもらう観光のあり方を議論する。美瑛の四季の魅力を自分

たちで体験しよう——と昨年暮れには、美瑛富士の麓で動物の足跡をたどるツアーも企画してみた。

代表の岡田良平さん（喫茶店経営）は、愛知県の自動車メーカーを辞めて美瑛に移り住んだ。だから、地元の人気がつかない町の魅力がよく分かる。

「百万人の観光客に百円を落とすというのを考えずに、二百万人を追求するのがヘルシージーン発想。そこには入り込み数しか物差しがない。観光客の大半は富良野から層雲峡に向かう途中の通過客で、丘を見て拓真館に立ち寄るだけが多い。質のいい客を滞在型に導くために、我々が核になってアイデアを出したい」

と意欲的な岡田さんは、コクドのスキー場計画に対して、

- ①周辺にはスキー場が多く客数も減っており、美瑛まで来るのか疑問
  - ②自然保護の費用を含めると造成コストが高くなり、自治体や住民に負担がかかることを危惧する
  - ③隠れた美瑛の魅力を発掘するだけで、いろんな観光客に来てもらえる
- と批判的である。会員の一人、美馬牛地区でユースホテルを営む白石等

さんは、宿泊客のクロスカウンターツアーを企画して、美瑛富士に連れていくことがある。「自然の中で滑る体験は素晴らしい、お金はちつぽけでも感動は比べものにならない。観光客が求めているのは大きなスキー場ばかりじゃない」と力を込めた。

手づくりリゾートを模索する若手や新住民らの動きは、コクドにすぎる町や、煮え切らない態度に終始する林野・環境行政とは対照的である。「進めるべきなどの推進団体は、一度掲げた誘致の旗を降ろせないでいるが、コクドが抜けたら抜けたで仕方ない。スキー場だけで町が活性化できるものでもなく、他の観光をきちんとやれば山をいじることもないんだが」と、揺れる心境を漏らす役員もいた。

西武資本が美瑛に触手を伸ばしてから十五年あまり。今こそ、いっそうに進展しない計画を根本から見直し、新住民や自然保護団体の知恵も借りながら、豊かな自然環境を損なわない地域づくりを議論すべき好機ではないか。それができないようでは、美しい景観とは裏腹の暗く沈滞した町になってしまうだろう。